

「火のようにかざしたこぶしの叫び」もて「反原発都市」と・・・

われら 地球という星の一隅の列島の そのまた一隅に仮寓する者
われら 許されたる仮寓の条件をも自壊する 愚かなる所業をなす者の末裔

AD2011年春3月 我らの仮寓する列島^{シユツタイ}東北部に出来する驚天動地

その驚天動地の底で果てた 幽明境を異にする人々よ
その驚天動地に連なる愚かなる所業の累積の極みを 背負い続ける人々よ

もし許されるものであるならば
もし許されるものであるならば

「火のようにかざした / こぶしの叫びは いつでも /
踏みにじられた その苦しみの / うちがわに反響するうめきを聞くのは /
けれども いつもぼくらだ / けっして あのものたちではない」(*)
その「うめき」の〈むこう〉へ その「うめき」の〈むこう〉へ

されば われら いと高きにあるものを 求めん
されば われら いと大いなるものを 求めん
——天と地に恥ずることなきわが身を その間に自ら立たしむることを

「あのものたち」の領する国家 それはわれらの「後」^{のち}なるもの われら その内部の
外部とならん

「あのものたち」の操る「プロメテウスの第2の火」^{先見の明を持つ者} それは「第1の火」の「後」^{あと}なるもの
われら それをその「先見の明」のうちに還さん

われら 天と地に恥ずることなきわが身を立たしむる われらの仮寓する地を 「火の
ようにかざした叫び」もて 「反原発都市」と呼ばん 「火のようにかざした叫び」も
て 「反原発都市」と呼ばん

(*) 新城兵一「内破一辺野古」(「宮古島」文学5号)
から——「あのものたち」の内に私・たちが在
ることを恐れながら・・・